

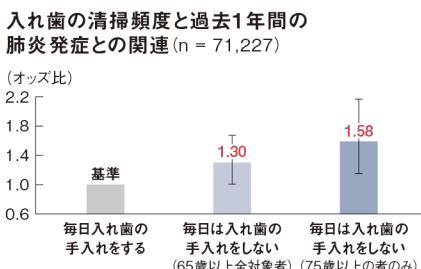
健康推進歯学分野
相田 潤教授

あいだ・じゅん

2003年北海道大学歯学部卒業。2007年北海道大学大学院歯学研究科博士課程修了(歯学博士)。University College London客員研究員、東北大学大学院歯学研究科国際歯科保健学分野准教授などを経て、2020年より現職。専門分野は公衆衛生学、社会疫学。歯科疾患の健康格差、口腔と全身の健康の関係、ソーシャルキャピタル、東日本大震災による被災者の健康に関する研究に従事。



社会的経路を考慮した 疫学研究により 口腔の健康と認知症の 関連を解き明かす



*年齢、性、喫煙歴、所得、教育歴、現在歯数、ADL、脳梗塞・認知症の既往、肺炎球菌ワクチン接種の影響を統計学的に除外
Kusama T, Aida J, Yamamoto T, Kondo K, Osaka K: Infrequent Denture Cleaning Increased the Risk of Pneumonia among Community-dwelling Older Adults: A Population-based Cross-sectional Study. Sci Rep 2019, 9(1):13734.

近年研究が進む口腔の健康と全身の健康の関係性。特に口腔ケアが誤嚥性肺炎予防に有効であることは、さまざまな実証を経て広く知られています。しかし、これまでの口腔衛生と肺炎の関連に関する研究は、入院患者、介護施設入所者を対象としており、地域在住の高齢者に対する研究はありませんでした。

健康推進歯学分野の相田潤教授は、65歳以上の地域在住高齢者約7万人を対象に、義歯の清掃頻度と、過去1年間の肺炎発症の有無の関連を横断研究で調査。その結果、義歯を毎日は清掃

しないことにより、肺炎発症リスクが1・30倍、75歳以上の人では1・58倍高いことが明らかになりました。「一般の高齢者でも、義歯や口腔の汚れが誤嚥性肺炎発症のリスクを上昇させる可能性を示した初めての研究です。一般的の高齢者の口腔衛生状態も清潔に保つことが、日本人全体の誤嚥性肺炎の発症を減らすことに繋がると考えられます」

さらに相田教授は、生物医学的メカニズムだけでなく、社会的パスウェイを特に考慮した口腔の健康と全身の健康の疫学研究に注力。現在は、口腔の健康と認知機能の低下に関する研究に取り組んでいます。

認知症のリスク因子に「社会的孤立」がありますが、相田教授の研究では、歯が少なく義歯も使わない高齢者は、歯が20本以上残る高齢者よりも閉じこもり状態になるリスクが高いことが分かつています。「社会的孤立の要因に口腔の健康の悪化があると考え、検証を進めています。先進的な解析手法による因果推論を進め、社会的経路の観点から口腔状態と認知症の関連を解明していきたいと考えています」

義歯を毎日清掃することが 誤嚥性肺炎予防に有効